

ココダ・ココバ・ココラ

我妻多賀子

一、はじめに

『万葉集』第三期の代表的歌人で、特に叙景歌に優れていた山部赤人に、左のような歌がある。

み吉野の 象山(きさやま)の 際(ま)の

木末(こぬれ)には ここだ(幾許)もさわく

鳥の声かも

△卷六・九二四▽

これは、吉野の離宮のことをほめたたえた長歌のあとに置かれた短歌の一つで、全釈すると、「み吉野の象山

の山あいの木々のこずえには、こんなにも多くの鳥が鳴き騒いでいることよ」となる。なお、「象山」は、奈良県吉野郡吉野町に位置する宮滝の近くにある山のことを指している。右の歌はたくさんの鳥が鳴き騒いでいる情景を詠んで、吉野の離宮にぎわいをよろこび、暗にこれからの繁栄をも祈願している意味にとれるが、平凡で淡々としたうたい方の中で、下の句の初めにある語の「ココダモが、作者の「こんなにも多く」という驚きやよろこびの気持ちをよく表している。ココダモは、副詞ココダに係助詞モが付いたもので、『万葉集』の中では、ココダがココバの形でも出て来る。

また、中古に入ると、同じ意味でココラという語が使われていることは、左の『竹取物語』の例などから明らか

かである。

我子の仏、変化（へんげ）の人と申しながら、

「こころ」大ききまで養ひたてまつる志（こころざし）

おろかならず。

右は「大切なわが子よ、あなたは人間以外のもので、この世に人間の姿で現れたものとは申しながら、これほどの大ききまでお育て申し上げた私の志は、一通りではありませぬ」と訳すことが出来る。ここは要するに、翁が、かぐや姫を「こんなに大きくなるまで」養育したことは、並大抵のものではなかつたと強く述べているところであるが、文全体の中で、副詞ココラが効果的に使われている。

以上、「こんなに、これほどの」の義を表す語としてココダ、ココバ、ココラの三語が考えられるが、それでは、はたしてこれらは意味・用法上、全く変わりがなかつたのか、また、時代的には、どのように用いられていたのかなどについて、調べてみようと思うのが本稿の目的である。

以下、はじめに三語それぞれについて調査結果のあらましを記し、続いて、全体を比べてまとめてみることにしたい。

二、ココダ

『万葉集』を見ると、一字一音書きのココダは、左の二例が見えるだけである。

〇妹が家に雪かも降ると見るまでにここだ（許々陀）も乱（まが）ふ梅の花かも △卷五・八四四▽

〇多摩川に曝（さら）す手作（てづくり）さらさらにも何そこの児のここだ（口許太）愛（かな）しき

△卷一四・三三七三▽

初めの歌は「妹の家に雪が降るのかと見えるほどに、こんなにもたたくさん乱れ散る梅の花であるよ」、そして二番目の歌は「多摩川にサラす手作りの布のように、サラニサラニどうしてこの子がこんなにひどくかわいいのだろう」と解釈出来るので、副詞ココダは「これほどに多く」とか「こんなににはなはだしく」の意で用いられて

いることになる。そして、ココダが対象としている「梅の花」や「子(恋人)」、さらには先述した山部赤人の吉野の象山の歌の「鳥」などに共通して言えるのは、これらがいずれも作者の身近な所、言い換えればウチの領域に属しているものということである。

つまり、ココダは話し手の領域内の見聞・体験に関する量が多いことや、程度がはなはだしいことを示す時に用いる語であるといえる。したがって、コは此(こ)の意味にとることが可能で、それに、量・程度についていう接尾語ダが付いたものと考えられる。接尾語ダは、イクダ、コキダなどのダと同じで、ラに通じるものである。ところで、『万葉集』には、右に挙げた一字一音書きのココダ二例の他に、計十六例のココダが出て来るが、これらはすべて、先の山部赤人の歌のように、漢字「幾許」をココダと訓んでいるものばかりである。そのうちのいくつかを、左に掲げることにする。

○玉藻よし 讃岐の国は 国柄か 見れども飽かぬ
神柄か ここだ(幾許) 貴(たふと)き 天地
日月とともに 満(た)りゆかむ 神の御面と
継ぎて来る 中の水門(みなと)ゆ 船浮けて
わが漕ぎ来れば
△巻一・二二〇▽

○海山も隔たらなくは何しかも自言をだにもここだ(幾許) 乏(ども)しき
△巻四・六八九▽
○荒磯(ありそ) 越す波をかしこみ淡路島見ずか過ぎ
なむここだ(幾許) 近きを △巻七・一一八〇▽
○語りつぐからにもここだ(幾許) 恋しきを直目(ただめ)に見けむ古壮士(いにしへをとこ)
△巻九・一八〇三▽

○誰が園の梅の花そもひさかたの清き月夜にここだ(幾許) 散り来る
△巻十・二二三二五▽

○夢(いめ)のみに見るすらここだ(幾許) 恋ふる吾(あ)は現(うつつ)に見てばまして如何にあらむ
△巻十一・二五五三▽

○わがここだ(幾許) 慕(しの)はく知らにほととぎす何方(いづへ)の山を鳴きか越ゆらむ
△巻十一・四一九五▽

○わがここだ(幾許) 待てど来鳴かぬほととぎす独り聞きつつ告げぬ君かも
△巻十九・四二〇八▽

これらを順に部分訳してみると、「神の性格がこんなにはなはだしく貴いのか」「お会いしてお話することだけでもどうしてこんなに少ないのでしょうか」「淡路島(八) こんなにも近くなのに」「物語を語り継ぐだけで

も「こんなにもひどく恋しいのに」「こんなにもたくさん散つて来るのは」「夢だけに見るのですからも「こんなにはなほだしく恋しく思う私は」「私がこんなにも慕っていることを知らないで」「私がこんなに待っていて」となり、いずれも自分の領域内に属するものに関し、量の多さ、程度の激しさについて、驚きの気持ちを込めて述べている点で、共通している。熟語の「幾許」は、『文選』第二十九卷の雑詩の中にある作者未詳の「古詩十九首」に次のように出ている。

相去 復 幾 許

「古詩十九首」はすべて、右のような五言から成り、古来、五言詩の第一と言われている。この場合、「幾許」は「幾可」と同じで、意味的には「どれほど、なにほど」ととれる。つまり、熟語「幾許」は、元々、音でキキヨ、訓で「いくばく」とよむ。「どれほど、なにほど」の義で使われていた語で、日本に入ってから、イクソバクゾ、イクバク、イクバクバカリ、イクラバカリなど、疑問の意を含んだ訓でよまれていたが、それが、ココダク、ココタク、ソコバクなどの訓にも転用されたらしい。ちなみに、『万葉集』では、「幾許」はイクバク、コ

コダ、ココタクと訓まれ、『類聚名義抄』（観智院本）では、イクハクハカリ、イクラハカリという訓がついている。

さて、『万葉集』のココダの例をながめて来たが、実はこの語、他の文献では用例が見つからない。そこで、集中の十八例について、その用法をもう少し詳しく調べてみると、半分に近い七例までが形容詞にかかり、それも「恋し」「乏（ども）し」「愛（かな）し」など、いわゆる心情を表すシク活用の形容詞が多い。あとの十一例は動詞にかかっているが、その動詞も、半分以上は、「思ふ」「偲ふ」「恋ふ」など、心のあり方を示すものである。そして、この用法上の特色を意味と関連させてみると、言うまでもないことだが、心情表現の形容詞や動詞にかかる場合には、ココダは量ではなく程度を表し、「こんなにもひどく」とか、「これほどはなほだしく」という訳があてはまる。

いずれにしても、ココダは上代でのみ使われていた語で用例は『万葉集』に見えるだけである。ところで、このココダには、派生した語がいくつも見える。まずその一は、ココダに副詞をつくる語尾クがついたココダクというものである。これも上代にしか用例が出て来ないが、初めに、その一字一音書きの例を挙げてみることにしよう。

う。

○汝等(いましたち)を皇朝(すめらがみかど)は
こごたく(「已太久」高く治め賜ふを、何を怨(うらめ)しき所(こと)としてかしかせむ

△続紀宣命・一八▽

○天離(あまざか)る鄙(ひな)とも著(しる)く

こごたく(許已太久)も繁(し)き恋(こ)かも和(な)る

日も無く

△万葉・卷一七・四〇一九▽

○如何(いか)にある布勢(ふせ)の浦(うら)をもこごたく(許已太久)に君(きみ)が見(み)せむとわれを留(とど)むる

△万葉・卷一八・四〇三六▽

○高(たか)つ鳥(とり)の災(わざ)・畜(たく)休(やす)む(けものたふ)し、體物(ていぶつ)(まじ

もの)する罪(つみ)、こごたく(許已太久)の罪(つみ)出(で)む

△祝詞・六月の晦の大祓▽

右の例は順に、「「ごんなにも高くお治めなさるのを」
「ごんなにもひどく妻が恋しいことだ」「これほどには
なはだしくあなたが私を引き止めて見せようとなさると
は」「ごんなにも多くの罪」と部分訳することが出来、
ココダクは先述したココダと意味的に相違のないことが
わかる。他に上代の文献を見ると、『万葉集』に「幾許

や「幾許久」などを、ココダクとよんだ例が、十四例出
て来る。それらの使い方を見ると、心情表現を示すシク
活用の形容詞にかかる例は余りないが、動詞の「恋ふ」
とか「思ふ」にかかるものは、半分近くもあり、ココダ
と用法上よく似ている。

さらに、ココダクの用法で目立つのは、係助詞モが後
について、ココダクモの形で用いられる場合が多いこと
である。『万葉集』では、左に何例か記すように、ココ
ダク十六例のうち、半分近い七例までがこの形をとって
いる。

○相(あ)見(み)ては幾(いく)日(か)も経(た)ぬをこごたくも(幾許

毛)狂(くる)ひに狂(くる)ひ思(おも)ほゆるかも △卷四・七五一▽

○夕(ゆ)影(かげ)に來(き)鳴(な)くひぐらしこごたくも(幾許)日(か)ごと

聞(き)けど飽(あ)かぬ声(こゑ)かも △卷一〇・二二五七▽

○ぬばたまの夜(よ)は明(あ)け行(い)きぬ こごたくも(

幾許雲) 思(おも)ふ如(ごと)しならぬ 隠(かく)妻(つま)(こもりつま)かも
△卷一三・三三二二▽

右に挙げた例は、順に「ごんなにもひどく物狂おしく
恋しいことである」「ごんなにも多く毎日聞かぬけれど」
「ごんなにもはなはだしく思うようにできない隠妻です」

と解釈出来るので、ココダクモはココダヤココダクと同じく、自分の領域内に存するものに関して、量の多さ、程度の激しさを述べていることになる。よって、意味的にココダクと大差はないが、係助詞モがついたことで、より強調した表現になっていると言えよう。

以上、ココダから派生したココダクは、意味・用法上ココダとほとんど変わりがない。ただ、ココダが『万葉集』のみに見られたのに比べ、ココダクは『万葉集』ばかりか、「宣命」や「祝詞」にも一字一首書きの確実な例が出て来るので、上代語としては、かなり広く用いられていた語のように思われる。

次に、ココダから派生したものととして、もう一つ、コキダという語が見える。コキダは言うまでもなく、ココダの第二音節が母音交替したもので、キ(木)とコ(木) (木末)の關係と同じく、乙類のイとオの交替と言える。そのコキダは、上代の文献では、左に記す記歌謡の例と、その重出である紀歌謡の例しか見られない。

○後妻(うはなり)が 肴(な) 乞はさば いちさか
き 実の多けくを こきだ(許紀陀) ひゑね

△記歌謡・九V

○後妻(うはなり)が 肴(な) 乞はさば いちさか

き 実の多けくを こきだ(居気露) ひゑね

△紀歌謡・七V

右の二例は、いずれも同じ意味で、「可愛い若女房が獲物を呉れといったら、イチサカキのような中身の多いところをたくさん削ってやれ」となる。したがって、コキダは量的に多いことを言い、ココダと同義であることがわかる。

ところで、コキダは、このままの形では右の二例が出て来るだけであるが、派生すると、複雑化してさまざまな形で用いられる。まず、ココダからココダクが生じたように、コキダからは、副詞構成語尾クがついたコキダクが生まれる。

○三笠山野辺行く道はこきだくも(口伎太雲) 繁(しじ)に荒れたるか久(ひさ)にあらなくに

△卷二・二三三V

○三笠山野辺行く道こきだくも(口伎太久母) 荒れにけるかも久にあらなくに

△卷二・二三三V

「笠朝臣金村の歌集」に出ている旨の左注がついている初めの歌の「本の歌」が二番目に記した歌で、共に「

「こんなにもひどく草が繁く荒れたことであるよ」の意味になる。コキダクは右に記した『万葉集』の二例しか用例が見つからないが、係助詞を伴って感動的に用いられているなど、用法的にココダクによく似ている。

ただ、注意しなければならないのは、『万葉集』の場合、コキダクが甲類の仮名「伎」で記されている点にある。記紀のコキダの場合、キは「紀」と「氣」で書かれ、いずれも乙類の仮名であった。コとキの交替を考へれば、先述したように、このキは乙類の仮名で書くべきところである。『万葉集』が甲類の仮名を使っているのは、あるいは誤用なのか、それとも甲乙がゆれているのか、他に用例が見られずよくわからないが、意味・用法の点から見れば、このコキダクをコキダと関連させてみることに、特に差し支えはないと思う。

さらにコキダには、コキダシという形も見える。

○こぎだしき(許貴太斯伎) おほき天の下の事をやた
やすく行はむと思ほしまして 〆続紀宣命・七〇

右に挙げた「宣命」の例がその唯一のものであるが、この場合、コキダシのキは乙類の「貴」の仮名で書かれていて、用字の上では問題なく、ココダとの関連性が明

らかに認められる。意味的にも「こんなにも重要な大天下の事を容易に行おうと思ひになつて」となるので、コキダシはコキダとほぼ同義の語と言える。なお、このコキダシは、副詞コキダから派生したシク活用形容詞で、イマダからイマダシ、ホトホトからホトホトシが生じるのと同じものと考えられる。

以上、ココダについて、種々考察を加えて来たが、この語に副詞をつくる語尾クがつくと、ココダクとなり、また第二音節が音韻交替すると、コキダとなった。さらに、コキダは副詞構成語尾クがつくと、コキダクとなり、形容詞化すると、コキダシの形でも使われていた。これを図示すると、左のようにでもなるであろうか。

ココダ ———— ココダク
 ↳ コキダク
ココダ ———— コキダシ

右のように、ココダ一語から何語かが派生してはいるが、皆意味的には、いわゆるウチに属するものについて、量が多いこと、程度がはなはだしいことを述べる時に使う点で共通し、用法上もよく似ているものが多かった。その上、これらの語はすべて、上代の文献にのみ、その

用例が出て来たことに注目し、続いてココバについてながめてみることにしたい。

三、ココバ

ココバは『万葉集』に一字一音書きの例が三つ出て来る。

○足柄(あしがり)の安伎奈の山に引こ船の後(しり)引かしもよここば(許已波)来(こ)がたに

△卷・一四・三四三二V

○白雲の絶えにし妹を何為(あせせ)ろと心に乗りてここば(許已婆)かなしけ

△卷・一四・三五二七V

○秋の夜を長みにかあらむ何(な)そここば(許々波)眼(い)の寝らえぬも独り寝(ぬ)ればか

△卷・一五・三六八四V

右はそれぞれ「足柄のアキナの山で船を後から引いておろして行くように、帰る夫の後を私は引く張りたい。私のところへ来るのがこんなにもひどく難しいのだから」
「仲の切れてしまった妹なのに、心にかかつてこんな

いとしいのは、どうせよというのだ」「秋の夜が長いからであろうか。どうしてこんなにも寝られないのだろう。ひとり寝るからだろうか」と訳すことができる。この場合、ココバは、自分の身近にあるもの、もしくは関係の深いものについて、その程度が激しいことを述べているその点で、これまで見て来たココダおよびそれが派生したいくつかの語と意味上変わりはない。したがって、ココバのバは、ココダのダと同じく量・程度をいう接尾語とすることが出来る。あるいは、ココバが使われた歌の出て来る箇所から推して、ココバはココダの訛音とすることも可能であるが、いずれにしても、コをコ(此)とすることは問題ないであろう。

ところで、右のようにココダと意味・用法が非常によく似ているココバは、ここに掲げた『万葉集』の三つの例以外には出て来ない。ただ、ココダに、副詞をつくる語尾クのついたココダクが存していたように、ココバにも、ココバクという形が見える。

○島廻(しまみ)には 木末(こぬれ)花咲き ことばく(許已婆久)も 見の清(さや)けきか 玉匣(たまぐしげ) 二上山に 延(は)ふ鳥(つた)の 行きは別れず
△卷一七・三九九一V

右に挙げた『万葉集』の歌が唯一のその例であるが、部分的にココバクのところは「こんなにも景色が美しいのか」と訳すことが出来るので、意味的にココバクもこれまで見て来たココダ、ココダク、ココバなどと大差はない。また、係助詞毛を伴っている点や、下に来る形容詞にかかっている点など、用法の面でもこれまでのものによく似ている。そして、注目すべきなのは、今までのココダ以下がすべて上代にのみ使われていたのに対し、このココバクは、中古に入っても用例が出て来る点にある。すなわち、中古の作品である『宇津保物語』を見ると、左に記すようなココバクが、全部で十一例使われている。

- (忠こそを) ここばくもとめさせ侍に、はべらぬは
世中になくなりたるにこそ侍めれ。△忠こそ▽
○かくて、ここばくのおとこ、女、おとこも妻(め)
具し給へる、さらにほかずみさせたてまつり給は
ず。△藤原の君▽
○ここばくの箏(しやう)の御ことなど物にかきあは
せてつかうまつるなかに、一日藤壘にてつかうまつ
りしばかりおもしろき、なせ侍らぬ。△初秋▽

○ここばくの曰ころ、いとさしもあらんありぬべきを
・・・
△楼上・下▽
○ここばくの御子達・上達部見て、これをいかかなら
んと心を惑はしておもほえ給ふ。△楼上・下▽

右を順に部分訳すると、「こんなにもひどく捜し求め
させますのに」「こうしてたいそう多くの男君、女君が
あって」「こんなにたくさん箏の琴を弾きながら合奏い
たしましたが」「こんなに多くの間、そうまでなさらな
くてもよろしかろうに」「こんなにも多くの御子達・上
達部が見て」となる。したがって、ココバクは、これま
で見て来たココダ、ココダク、コキダ、ココバなどと同
じく、自分の身近な領域のものに関し、量が多いこと、
程度のはなはだしいことを述べていることになる。

ただ、ココバクがこれまで述べて来たものと違うのは、
右にもいくつか挙げたが、格助詞ノをすぐ下に伴い、そ
の次に来る体言にかかっているという語法が目立って多
いことである。副詞語尾クが付いたシバラク、シマラク、
ソコバクなどの語は、この種の使い方をするところがある
ので、ココバクの場合も、特にこの形で用いられること
に問題はない。むしろ、今までに出て来たココダク、コ
キダクなど、用法的にココバクと類似したものに、この

種の用法が見られなかったという点で、ココバクの用法範囲の広がりを感じられる。ちなみに、『宇津保物語』のココバク十一例のうち、九例までが右のような「ココバク+格助詞ノ+体言」の形で用いられている。

その他、ココバクは左のように古辞書にも見られる。

阿堵 コゝハク

△色葉字類抄▽

阿堵 ココバク

△観智院本類聚名義抄▽

右のうち、「名義抄」の方には、声点が二つついているので、第三音節は濁音であったことがわかる。また、親字の「阿堵」は六朝・唐の俗語で「この、これ」の義を有するということから、ココバクと代名詞コ（此）との関係が認められる。

ところで、『宇津保物語』には、ココバクによく似たココバクという語も使われている。コトクは、変体平仮名で書くと、誤写の範囲に入るので、間違えやすいとは思いますが、その例が六例も出て来ること、コトクの音韻交替が可能であることから考えて、ココバクという語の存在は、一応認めてよいであろう。なお、その意味および用法は、ココバクとほとんど変わりがないので、ここで

は、とりあえず左に、その例だけをいくつか記しておくことにしたい。

○こくばく齋(いは)はれ給ふ師、学問の力に、恥救ひ願満て給へ。 △祭の使▽

○こくばくの国母・天人の中に我一人こそは勝れたる徳あれ。 △初秋▽

○一二丁を経て行く人々の、この様の錦綾の、こくばくの年月、様々の香(かう)どもの香(か)にしみたる、風吹く度ことにかうばしきを賞(め)であやしむ。 △楼上・上▽

以上、ココバから派生したココバク、さらにそれが音韻交替したココバクには、中古以降の用法も見られるので、ココダよりココバの方が後に発生したと考えていいのではないだろうか。それでは、最後にもう一つ残ったココラについて見て行くことにしたい。

四、ココラ

平安時代の初めに成った日本最古の仏教説話集『日本霊異記』に、左のような記事が出ている。

。因りて時に王、手を拍(う)ちて言はく、「如許は世間の衆生の罪を作(な)し、苦を受くるを見るに未だ此の人の如く、太(いと)甚だしく罪を作せるを見ず」とのたまふ。
△下・三七▽

右の文中、王が手を打っていった言葉の初めに出て来る「如許」は、前田家本の訓釈によると、「己之羅許曾及」となっている。このまよむとこの部分は、コシラコソハとなるが、これは「己之羅許曾波」の誤りで、正しくはココラコソハとよむと言う。そして、王の言葉の部分了解釈すると、「ずいぶん多く」の者たちが罪を作り責め苦を受けるのを見たが、まだこの者のように多くの罪を犯した者を見たことがない」となる。つまり、ココラコソハは、「ずいぶん多く」の意を表す副詞のココラに係助詞のコソとハがついたものと考えられる。ところで、この『日本靈異記』の例とよく似たものが『新撰字鏡』に左のように出ている。

如許 己々良志己曾波

右に記した親字「如許」は『日本靈異記』の場合と同

じである。また、そのよみは、ココラシコソハとなり、『靈異記』と比べると、シが一字多いだけである。このシは、強めの副助詞にとれるので、ココラシコソハを語分解すると、ココラが副詞、シは強めの副助詞、コソとハは係助詞と考えることが出来る。

なお、『新撰字鏡』は、九世紀末に字僧の昌任が著した現存最古の漢和辞典である。したがって、右の『靈異記』と『新撰字鏡』の例から、平安時代初期には、ココラという副詞の存在していたことがわかる。ただ、これら二例より前にはココラが見当たらないので、上代にはこの語はまだ使われていなかったものと思われる。

また、その意味は、これまで見て来たココダ、ココバなどと同じく、自分の身の回りのものに関して、量が多いこと、程度が甚だしいことを述べている。よって、ココラのラは、ココダのダ、ココバのバと同じく、量・程度を表す接尾語ととることが出来る。例えば、イクラのラなどと同じである。そして、ココのコはもちろん、コ(此)の意味であろう。

ところで、右のように、『靈異記』と『新撰字鏡』に出て来たココラは、以後、中古・中世を通じて、ジャンルに関係なくとてもよく用いられている。例えば、主要作品におけるその用例数を見ると、『源氏物語』が最

も多く三十八例、以下、『宇津保物語』三三例、『荣花物語』三一例、『狭衣物語』一五例などと続き、あとは大体各作品とも、一桁台の数で用いられている。

右の作品に出て来た用例を吟味してみると、いずれも自分の身近に存在したり、自分に関係の深い事柄について述べている点では、これまでと変わりが無い。意味的には、ココラが程度の激しさを言うのか、数量の多さを言うのか判然としないものも見られるが、総じて数量について述べる例が多い。そして、数量が多いことを言う場合、意味・用法などの面から、ココラは次のように、AとCの三つに分けて考えることが出来る。

Aは、ココラの下に格助詞ノがつき、そのあとに「日ごろ」「月ごろ」「年ごろ」「月」「年」などの語が来て、年月日の多いことを言うもので、左に記すように、通時的に、各作品ともよく用いられている。

○こころの日ごろ思ひわび侍る心は今日なん落ぬぬる。

△竹取物語▽

○めづらしき声ならなくに郭公こころの年をあかずもあるかな

△古今集・賀・三九▽

○こころのとしごろをつくしはて、かぎりなくまづ

しくなるまゝに

△宇津保・忠こそ▽

○こころの月ごろ念じつることをいふに・・・

△蜻蛉日記・天禄二年一月▽

○こころの年月すみなれたる世界を離れて・・・

△源氏・玉鬘▽

○こころのとしごろさかえさせ給へりつれば・・・

△荣花・三〇・鶴のはやし▽

○こころの年月思碎くる心のうちをも、つれなく忍び返して・・・

△狭衣・一▽

○こころの日ごろ身に添へる影のやうにて語らひなぐさめ給へど・・・

△浜松・四▽

○守殿(かうのとの)だにも、またこそこころの年月頃、まだしか召さね。△宇治拾遺・七ノ二▽

○こころの年頃にむばたまの夢ばかりだになくおほほれて・・・

△増鏡・序▽

続いて、Bはココラの下に格助詞ノが来ることは来るが、その下に年月日ではなく、人・物・場所などに関する名詞のつくものである。この場合は、言うまでもないことだが、ココラはその名詞について、数量の多さを述べていることになる。また、その用例数は、Aほど多くはないが、左記のように、平均してよく用いられている。

○このらの公人に見せて恥を見せん。 〆竹取▽
○よのなかはいかに苦しと思ふらんこのらの人にう
らみらるれば 〆古今・雜・一〇六一▽

○このらのみこたちは、たがをもたがをもあちちて
なんうませたてまつりし。 〆宇津保・國護下▽

○このらの男女かみしもゆすり満ちて泣きとよむに
・・・ 〆源氏・若菜上▽

○このらとのばらの御くるまひきつつけてうちに
まゐらせ給。 〆栄花・八・はつはな▽

○このらのすべらぎの御有様をだに鏡をかけたまへ
るに・・・ 〆大鏡・後一条院▽

○このらの国々を過ぎぬるに・・・ 〆更級日記▽
○このらの宝を尽して、うへの思し急ぐ幸あを・
〆狭衣・三▽

○やむごとなき人の、このらの使人に囲繞せられて
入り給ふ有り。 〆発心集・補遺二▽

○は、直接下に格助詞を伴わない形で有りながら、コ
コラが「こんなにくさん」の意で、数量の多さを表し
ている例である。この場合、ココラのかかつて行くもの
は、人・時・物など種々雑多である。また、アツマル・
ムラガルなど量の多さを言う動詞を伴う例が目立つ。な

○お、その用例数は、格助詞ノがすぐ下につくものには及
ばないが、左のように通時的にはよく用いられている。

○うつろはぬ心のふかくありければこのらちる花春
にあへること 〆後撰集・雜・一一五六▽

○このら一人あかす夜、かかる音のせぬは、ものの
たすけにこそありけれとまでぞきこゆる。 〆蜻蛉日記・天禄三年一月▽

○このらめでたき人々を握念並めて御覧することそは
うらやましけれ。 〆枕草子・二七八▽

○このらとしへ給へる御仲にさし出でたまはむこと
はいかが。 〆源氏・胡蝶▽

○このらおほくおはする宮たちの御なかに・・・
〆栄花・一〇・ひかげのかづら▽

○このら集りたまへる中にもしおはしましやすらむ
と思うたまへて・・・ 〆大鏡・道長上▽

○このら思のこすことなき御祈りのしるし有とも見
え侍らざるを・・・ 〆夜の寢覚・二▽

○このら集まりし人、涙を流しつつ尊みあへる程に
・・・ 〆発心集・八ノ三▽

○ココラ、ムラガリ居テ聞キケル中ニ
〆沙石集・五末ノ二▽

○彼の棧敷の前をこころ行きかふ人の見しれるが、
あまた有るにてしりぬ。 △徒然草・一三七V

以上、數量の多さを述べるココラについては、大ざっぱに右のように三つに分けて考えられるようである。

続いて、程度の激しさを言うココラであるが、これは余り多く出て来ない。ただ、歌の場合は例外で、例えば八代集を見ると、九例のうち、五例までが程度について述べている。

○こつたへばおのがはかせに散る花をたれにおほせてこころなくらん △古今集・春・一〇九V

○もみぢばの散りてつもれる我やどにたれをまつむしこころなくらん △古今集・秋・二〇三V

○秋の野にきやどる人もおもほえずたれをまつむしこころ鳴くらん △後撰集・秋・二六〇V

○秋の夜の月かも君はくもがくれしはしも見ねばこころ恋しき △拾遺集・恋・七八五V

○老て後むかしをしのお涙こそこころの人めをしのばざりけれ △詞花集・雜・三四四V

右のうち、『古今集』と『後撰集』の例は、三首とも

よく似た用法で、鳥や虫の鳴き方について「どうしてこんなにひどく鳴くのであろう」とココラを用いている。この場合、動詞「鳴く」が、どちらかと言うと、數量では示すことが難しいものなので、ココラは程度のはなはだしさを述べるものとした方がいいと思う。

次に、『拾遺集』の例は、ココラが「恋しき」と言う形容詞にかかっている。このように、心情表現を表すシク活用形容詞と共に用いられると、ココラは、量よりもむしろ程度を表すことは、左記にココダの考察の際にも述べた。例えば、左記の『源氏物語』の例なども、これに属するものと言える。

○かくおぼつかながらやと、こころ悲しきさまざまの愁はしきはさしおかれて・・・ △明石V

右は、光源氏が紫の上に出す手紙の一部で、紫の上の面影が目前から離れる時がないことを述べたあとで、「こうしてお逢い出来ず気がかりなままで永久にお別れするのかと思えば、多くのひどい悲しいさまざまの心配事は二の次になってしましまして」と、自らの心情を吐露しているところである。形容詞「悲し」にかかって行くココラは量的な意味も含まれていないわけではないが

むしろ「悲しさ」の程度について言っていると考へた方が、当たっているように思われる。

最後の『詞花集』の例は「年老いて後、昔を懐かしんで流す涙は、多くの人の目をも憚らないのだなあ」と、ココラを「人目」にかけて量の多さの意味で解釈することも出来る。ただ、これを「しのぶ」にかかるものとすると、ココラは、程度のはなはだしさを言い、「こんなにひどく人目を憚らないのだなあ」の意となる。心情表現の形容詞にかかる場合と同じく、ココラが「しのぶ」「思ふ」など、心のあり方を示す動詞にかかる時にも、量よりも程度を表すとした方がふさわしいことは、すでにココラのところでも述べた。やはりこれも、ココラは程度ととる方が適當と思われる。その他、左のような例なども、これに準じて考へていいのではないだろうか。

○世の人にも似ぬ御ありさまを見たてまつりはてん
とこそは、こころ思ひしづめつつ過ぐし来るに・

・
△源氏・真木柱▽

○こころ思ひ忍びびつる心のうちをほのめかしては中
々心騒ぎのみして・・・

△狭衣・一▽

○こころ思つることも言ひやる方なくむせかへる
を・・・

△夜の寝覚・一▽

○こころ物をのみ思して、今年は三十七にぞならせ
給にける。
△増鏡・三・藤衣▽

右のように、程度のはなはだしさを表すココラは、量の多さを示すものに比べて用例数が少なく、しかも、どれもここに述べたようないくつかのパターンに分けて考えられるものばかりである。

最後に、ココラの例は多かったので、主要作品における意味別用例数を一覧表にして示し、その後、この稿全体としてのまとめをすることにした。

なお、表中、数量のところ、AとCに分けたのは、既述したように、左の分類による。

A・・・格助詞ノを伴い、年月日についていうもの

B・・・格助詞ノを伴い、人・物・場所などの多さを示すもの

C・・・格助詞ノを伴わず、人・時・物などの数量の多さを示すもの

ココラの意味別用例数

源氏物語	枕草子	宇津保物語	蜻蛉日記	後撰集	竹取物語	古今集	作品名	
七	0	一二	一	0	一	一	A	数量を示す
一一	0	七	0	0	一	一	B	
一七	一	二	一	一	一	0	C	
三	0	三	0	一	一	二	程度	
三八	一	三三	二	二	四	四	計	

増鏡	沙石集	宇治拾遺物語	発心集	新古今集	大鏡	栄花物語	狭衣物語	更級日記	夜の寢覚	浜松中納言
二	0	一	0	0	0	八	七	0	0	一
0	0	0	二	0	二	一七	三	一	0	0
0	二	0	六	一	一	六	三	0	二	一
二	0	0	0	0	0	0	二	0	一	0
四	二	一	八	一	三	三二	一五	一	三	二

五、おわりに

以上、ココダ・ココバ・ココラの三語について、別々に考察を加えて来た。まずその結果を、左に分かり易く箇条書きにしてまとめてみることにする。

①意味的には、これら三語はほとんど変わらず、話し手の身近に存在するもの、もしくは話し手に関係の深いものについて、数量の多さや程度のはなはだしさを言うことで一致していた。

②用法的には、ココダとココバには派生した語がいくつも見られた。すなわち、ココダには、副詞構成語尾クを伴ったココダク、また第二音節が音韻交替したコキダ、および、それが副詞化したコキダク、さらに形容詞化したコキダシと計四つの派生語が存在していた。

また、ココバの方は、語尾クが付いて副詞となったココバクそしてその第二音節が音韻交替したコウバクが出て来た。ただ、もう一つのココラには、派生語は見られなかった。

③この三語に関する大きな相違は時代的な点にある。すなわちこの中で、もっとも古く使われていたのはココ

ダおよびその関連語で、いずれも上代にのみ用例が出て来た。次に古いのがココバで、この語もほとんどの例が上代作品に見られたが、派生したココバクとコクバクについては、中古の例が皆無というわけではなかった。一方、ココラは中古になって初めて使われるようになった語であった。したがって、この三語については

ココダ ↓ ココバ ↓ ココラ

という時代的な関係が認められる。

以上、右に記したように、考察結果を大きく三つに分けてまとめてみた。ところで、三語のすべてに見えるコは、意味の面から考えてコ(此)であり、これらはいわゆるウチに属する人・時・もの・場所などについて言及していることになろう。また、その後ろに付くダ・バ・ラは、どれも量・程度についていう接尾語ととれる。

そして、ココラにだけ派生語が見えないのは、この語の用法範囲が非常に広がったためと思われる。事実、ココラは下に来る用言にかかっていく普通の副詞的用法の他に、ココダやココダクに見られた心情表現の形容詞や動詞にかかる用法、および、格助詞ノをすぐ下に伴い、次に来る体言にかかって行くココバクやコクバクに出て

来た用法など、すべてをたつた一つで表現し得ている。つまり上代ではウチに属するものの数量の多さや程度のはなはだしさを言うのに、ココダ・ココダク・コキダ・ココバ・ココバクなど多くの語を用いて表していたものが、中古以降はココラが総括して表現するようになったものと考えられる。ただ、先に掲げたココラの意味別用例数の表を見れば明らかのように、中古でこそココラの用例数は多いが、中世に入るとたいぶ数が減少して来る。実際、中世以降、ココラは余り使われなくなつて来たようである。この時代に成つた『文明本節用集』などいわゆる古辞書の類や『日葡辞書』にもココラは載っていない。しかし、一六九八（元禄十一）年成立の『書言字考節用集』には、ココラの項目が挙がっているので、この語は近世に入つても、わずかながら使われ続けていたものと思われる。

さて、ココダ・ココバ・ココラの三語について調査結果のあらましを述べて来たが、ここに認められたダ↓バ↓ラの時代的推移は、はたして他の語にも見られるのか、また、この三語はいわゆるウチに所属するコ系の語であったが、ソ系の語の場合、こういう関係がないのかどうかなど、まだまだ問題点が多い。これらは今後の課題とし、とりあえず今回は大方のご叱正を期待して、この辺

で筆をおくことにしたい。

なお、今回の調査に当たり数々の作品を参考としたが、この稿に記したもので、岩波書店発行の『日本古典文学大系本』以外を底本としたものは、左の二作品だけである。

○続日本紀宣命……「続日本紀宣命 校本・総索引」、北川和秀、吉川弘文館、昭和五十七年十月

○発心集……「発心集本文・自立語索引」、高尾稔・長嶋正久編、清文堂、昭和六十年